



TITLE:

[海]岸と有孔虫(チャップマン「有孔虫」から)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

[海]岸と有孔虫(チャップマン「有孔虫」から). 地球 1925, 3(1): 225-227

ISSUE DATE:

1925-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182795>

RIGHT:

(ロ) 日本中部に普通に産する板浦蛸、浦島、房州法螺等は地中海に産するものと殆んど同一である。

(ハ) 南亞弗利加から報告せられて居る「ニセイボラ」「クワンスガヒ」「カニモリガヒ」等は印度洋と濠洲とを飛び越えて我國に産する。

(ニ) 日本の淺海産の磨法螺は北海道も、アリウシアン、アラスカも通らずに北米中部の西海岸に産するのは不思議である。

## 海岸と有孔虫

(チャップマンの「有孔虫」から)

どんなに不注意な人でも、海岸、殊に入江に沿つてなだらかに傾斜した海濱を散歩する時には、退潮のために數條の砂の筋が現れて居るのに氣がついたことがあります。此の砂は肉眼

には、只の白堊質の煉けた破片の集りの様に見えますが、虫眼鏡で見れば、其白い點の一部が小さい乍ら完全な殻であることが判ります。此

斯く貝類の或る者は潮流の關係やら、環境の相似のため、或はまた習性の相通ふなどのため頗る意外な現象をあらはすことを思へば、現生種だの絶滅種だのの斷定を始め、其比例を以て種々の問題を論じる場合などには餘程慎重な態度を持たなくてはならぬことを痛感するものである、特に絶滅種の決定は現生種の採集と研究がなほ不充分的域を脱し得ぬ今日は「假定」以外は決せられない問題であらうと信ずる。

等の微細な殻は動物の最下等の部門に屬するものでありまして、内部の隔壁に孔があるので、有孔虫と言はれて居ります。

此の砂の中には、有孔虫に伴つて、他の小生物が入つて居ることがあります。例へば、二枚介の形をした甲殻類、即ち介蟲類の殻や、事によると植物の實まで入つて居ることがあります

然し有孔虫の殻は其特殊の形態と組織とで容易く見分けることが出来ます。即ち往々白くて、不透明か玻璃質又は半透明で、暫く表面に非常に繊細な、美しい彫刻があります。其微細なことは海岸の砂に含まれて居るのは特に微細ですが——はプランカスといふ人がアドリア海の砂一オンス中に六千個を数へたといふ事實から容易に想像されませう。而も此の數字は控え目に見積つたものです。

英國で殆ど全部有孔虫の殻で出来上つて居る海岸の最も良い例は愛蘭コンネマラ近くのドツグ湾の海岸であります。此處の砂は軟體動物の殻や介殻類其他の海棲生物の小さな混合物を含んで居て軽い有孔虫の殻は非常に遠くまで陸上へ吹き飛ばされて堆積して小山を作つ居ます。只今では此灣ばかりで百二十四の種と變種とが知られて居ます。

第一圖は英蘭サセックスの海岸の、砂で數多の有孔虫を含み、其に伴つて壞れた軟體動物の殻、珊瑚の破片、介蟲類及石英粒が入つて居ま

す。

然し乍ら、海岸の砂から採つた有孔虫の殻には動物體が入つて居りません。これは恐らく相當の時日の間吹き流された爲でありませう。

第一圖



有孔虫殻

第二圖



有孔虫の介形類の殻の砂粒及び綿のざげ

ば無數の有孔虫の殻が見られます。(第二圖)

此の小動物の生活状態を見るには、退潮の時に新鮮な海藻を採つて、海水を入れた硝子瓶の

多島海沿岸及び其島嶼の淺海の砂には多量の有孔虫の殻が入つて居ます。此處で採つた普通の洗濯用海綿を乾して、紙の上で振れば微粒の砂が得られます。これを虫眼鏡か又は度の低い顯微鏡で見れば無數の有孔虫の殻が見られます。(第二圖)

中に入れて置けばよろしい、暫く経てば有孔虫が其中で海藻から離れて動くのが見えます斯うなれば可成度の高い虫眼鏡で觀察することが出来ます。

生きて居る有孔虫は、黒い物の上で約四十倍の對物鏡を使つて見れば、非常に美しい見物で

す斯うして見れば此の殻は非常に微細な偽足糸の網で包まれて居ることが判ります。此の偽足糸は良く見ればある植物の細胞内の一種の循環運動に似かよつた偽足糸中の結晶粒の迅速な循環運動のために流狀運動をして居るのが見られます。

## 出雲の沖積地海岸

小牧 實 繁

出雲の沖積地海岸と云へば先づ杵築町より南方神西湖に至る延長約二里の海岸と、安來町の

西方飯梨川が中海に形成した三角洲の海岸とであるが、今自分が述べようと思ふのは前者に就てである。中海は其の名の示す如く内海で、此處では日本海の波濤も其の威を逞しうする事なく海水が靜穩であるから、此處に飯梨川の三角洲が發達して居るのであつて、其の發達と人文との關係の如きも興味ある問題であらうが、今

は之れに論及しない。

杵築町から南方神西湖に連る延長約二里の海岸は殆んど出入なく、甚だ單調な海岸で、奇巖怪石の存するものなく、海岸洞穴の怪異なものもなく、風景の美に於ては、杵築から日御碕を廻つて美保關に至る北出雲一帯の海岸や、石見國境の南出雲の海岸には到底及ぶ可くもなく、文人墨客の筆には上りそうもない海岸であるが其の殆んど凹凸なく單調である事實こそ、其處